

私の家族

第四回「中国大学生日本語作文コンクール」受賞作品集



この作文集は、中国の浙江工商大学日本文化研究所のよびかけにより2005年から開催され、浙江工商大学日本語言文化学院、北京大学日本語学科、大連大学日本語言文化学院、中山大学日本語学科が組織委員会となって2008年に実施した、第四回日本語による作文コンクールの受賞作品をまとめたものです。

私の家族

平成21年（2009年）8月20日 初版第1刷

編集・発行 有限会社国際文化工房

〒132-0035 東京都江戸川区平井5-22-9 田中ビル3階

Tel/Fax:03-3610-5882

印刷・製本 有限会社岩峰社印刷

ISBN978-4-907676-10-0

第四回「中国大学生日本語作文コンクール」受賞作品集

私の家族

国際文化工房

もくじ

愛にあふれている我が家
父の手
父の愛
家出事件
白いセーター
日記
私の家族
出会いと別れ
愛の形
お父さんの葉
言えなかったお礼
秘密
父の顔
家は教室

張	姜	朴	徐	陳	王	謝	姚	赫	周	沈	林	劉	王
雯	通	美蘭	盈盈	繆	菁鈺	曉玲	偉華	楊	韻	衛芳	燕鳳	永強	秋実
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	57	・	49	・	40	・	30	・	23	・	13	・	4
61		53		44		35		27		18		8	

一枚の写真にこめられた思い出
家族遺伝
後姿
親たちとの唯一の喧嘩
父の姿
兄弟五人の家族
父と母―私の一番仲がいい友達
母の愛
父が私にくれたもの
父親―字のない本―
私と家族
母の愛
愛のメッセージを最愛の家族へ
愛の形
私の父
埋められた親子愛、甦る絆

王	林	黎	曾	陳	陳	陳	周	黃	陶	黃	張	張	阮	孫	徐
韻	溢良	倩儀	娟娟	小萍	美英	娟娟	微	釵	凱	巧林	磊	藍天	蕾	劼	福君
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	126	：	117	：	108	：	99	：	90	：	82	：	72	：	64
130		122		113		104		94		86		77		68	

愛にあふれている我が家

大連大学三年生 王 秋実

私が小学生の頃に日本で起こった「酒鬼薔薇」事件は、もうみんなの記憶から薄れてきています。しかし今年、日本で起きた通り魔事件は調和な社会を乱しました。その警鐘はいつも心に鳴り響いています。

社会を構成する最も基本的な単位、それは家族です。家族の安定は社会の調和と深いつながりがあります。ですから、どのようにすれば家族関係を順調に築けるかということ、真剣に考えるべきだと思います。

すばらしい家族関係を築くためには、何よりも、家族一人一人の努力と和やかな雰囲気は欠かせないものだ。私は信じています。我が家では、職場や学校での

経験を語ったり、社会に関する意見を遠慮なく話し合います。また、ニックネームでお互いを呼び合い、家族の親しさも大切にするようにしています。

このような雰囲気があれば、誰も家族の平和を壊すようなことをしないとします。このような環境で育てられた子供は「酒鬼薔薇」事件のようなことをしないだろうと思います。

中国には、「ひとつの手のひらは音にはならず」という諺があります。それは「皆の協力でしか成功にならない」ということを意味します。ここでは、親だけが努力しても、また子供だけが努力しても、何もできな

響いていました。日本語の「三本の矢」はそういうことを表すもつとも適当な言葉ではないでしょうか。家族の愛で結ばれた私と両親は「三本の矢」のように強く、どんな障害をも乗り越える力を持っています。

また家族全員の努力以外に、おろそかにしてはならない要素として、相互理解があります。人間はそれぞれ独立した個体ですから、皆が同じ考えを持っているわけではありません。一緒に暮らしている家族と言えども、お互いの思想を完全に理解しあっているとは言えません。勘違いが生じた時も、相手の立場に立って理解すれば、誤解を解消することができます。

以前、私が日本語能力試験を受けた日の朝のことでした。母は出張していて、父がその日の朝食を作ってくれました。父も仕事のため、朝食を用意した後すぐ出勤していきました。私は起きて食卓を見ました。でもそこには一本のソーセージと二つのゆで卵しかありません。それを見て、私はとても不愉快な気持ちにな

りました。「朝食は受験生にとって、どんなに大切なかわからないの? しかも、あんなに早く起きたのに、どうしてこんなに簡単なご飯をつくるの?」と私は苛立ちを覚えました。しかし、その一列に並んだソーセージと卵を見れば見るほど、なんとなくアラビア数字の百に見えてきました。そして父の心遣いに気づきました。中国人にとって百点は満点を意味するのです。父は日本語能力試験の満点は四百点だということは知らないのですが、私が満点を取れるようにと、朝早くから一生懸命考えて、このような朝食を用意してくれたのでしよう。一見とても簡単な朝食には父の果てしない愛情が含まれていたのです。先ほどのふさいだ気持ちはすっかり感動に変わりました。それと同時に私は反省しました。もう少して私は、せっかくの父の気持ちを考える事を放棄し、家族の調和を乱してしまうところだったのです。

私たち中国人は欧米人のように「愛」をいつも口に

しないため、他人の優しい気持ちを無にしかねません。たとえ家族であっても、相手の気持ちを無視することは家族関係によくない影響をもたらします。それを口にしなくても、相手の気持ちをちゃんと理解して、誤解を招かぬように接すれば、家族との関係もより素晴らしいものになるでしょう。

私は暇な時、コーヒーを飲みながら、今は離れて暮らしている家族と一緒に過ごした楽しい時間を思い出し、幸せな気持ちで胸がいっぱいになります。そして将来、私も両親のように、心を込めて自分の家庭を作りたいと思います。私は自分の子供に、両親の愛と家族のためにがんばる気持ちを感じさせ、すばらしい家族を作りたいです。そうすれば、私も社会の平和に、小さい貢献ができます。

父の手

西安交通大学三年生 劉 永強

父の手はただだからで、ざらざらしていながら、とても力に満ちている。斧でまきを割るのは父にとって話すよりも簡単なことに相違ない。気性の激しい家畜をつかんで、家畜小屋につなぐのも落ち着いてしつかりと簡単にできる。私にとって、最も忘れがたいのは、彼が私の肩に手を置いて、空にゆっくり飛んで回るたかや、干し草の山に熟睡しているハリネズミを指差して私に見せるとき、その手から私の全身に流れる特別な暖流だった。父の丈夫な手は私に楽しい生活をもたらした。しかし、その丈夫な手で字を書くことがとても苦手なのが玉に瑕だ。父の最終学歴は小学校二年生

だ。彼が学校に通った時代には、授業で先生の質問を正しく答えなければ、手のひらを先生に木の板でたたかれたのだ。ところで、その時の父はともわんぱく坊主で、先生が教えた知識を真剣に頭に入れなかった。どころか、学校をサボることもよくしていた。祖父は子供が多く、余裕のない生活を維持するだけでも苦しかった。したがって、父は早い時期に退学させられ、丘陵にある畑で働かされるようになった。

成人してから知識が乏しいためにいろいろな苦勞と失敗を体験した父は、夜学に通ったこともあった。しかし、今でも父が骨を折って書いた文章は誤りだらけ

だ。が、その字を書くのに役立たない不器用な手は、そのほかのいろいろなことを見事にできる。父が耕した畑はいつも平に整い、父が建てた犬小屋は丈夫で長年経っても水が漏れない。農作業にとどまらず、かごを編むことでも家屋を築くことでも父の技術は優れている。父の人生にとって、彼の手が大プラスになったといつてよい。お前の父親は頭がよく、勤勉で正直な人だと村の人々はするように父を評価する。

母との雑談の間、母は私の生まれたときのことを偶然にしゃべったことがある。「お前は生まれたとき、泣きもしないで、大変だったよ。とても弱くて、犬の子のように小さくて、体重が三キロ足らずだったのよ。」と母が言った。「看護士がお前を抱いてお父さんに渡したら、お父さんが慌てて抱くこともできず、お前を手のひらにのせて慎重に支えながら、母さんに『小さい、小さい、わが子がかわいい』と子供のようにうれしく叫んだ」と母は両腕を上げ、父の真似をして、笑いな

がらそういった。私がこの世に生まれ出たばかりの時、父の手が私の命を支えてくれたのだ。

小学校に入った私は確かに父の遺産を受けた。その頃、私はいたずらが好きで、水泳や釣りに行って学校



劉永強（リウエイキョウ）：男、1986年12月10日山東省生まれ。2005年9月西安交通大学外国語学院日本語学科入学、同学科卒業見込み。2005年、西安交通大学思源新入生奨学金、杉山奨学金受賞。2006年、HSBC奨学金受賞。2007年の夏休みに、HSBCの支援をうけ

て地球観察研究所（EWI）が行った「中国伝統文化研究」という考察活動に参加。2007年10月、西安交通大学彭康奨学金受賞。趣味は映画鑑賞とバスケットボール。

をサボり、両親のものを盗むことまでもした。それを見つけるたびに、母はくどくどと私を叱るのに対して、父は何にも言わずに私を掴んで、その大きくて硬い手で私の尻を無情に重く打つのだった。いたずらの程度によって、父が私を打つ程度も違った。結局、父が手をあげると、私の心までもぶるぶると震えるようになってしまった。

ある日、家の近くの新築家屋に飾ったきれいなタイルが私の興味を引いた。私が勝手に石でいくつものタイルを打ち落として、部屋の壁も壊した。折り悪く、父がちょうどそばを通りかかって、私を見た。事情が分かった父は「それらのタイルを持って、部屋の持ち主に謝りに行ってこい」と私に命令した。部屋の持ち主の処罰を恐れる私はつい「行かない」と言い返した。ガツン！父の手が金槌になったようだった。目から火花が出た、痛くて涙も出た。結局、私はすこすこタイルを持って謝りに行った。幸いなことに、その持ち主は

子供の私を許してくれた。その後、私はそんなことを絶対しないようになった。父の手が怖かったからだ。

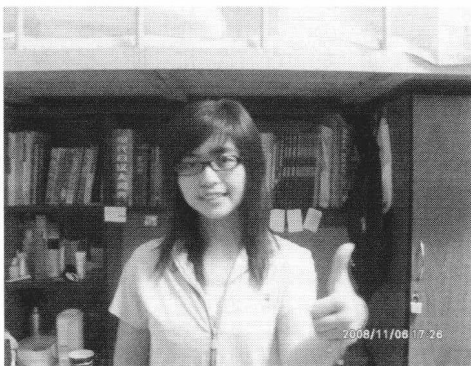
寒さに弱い私は、冬に入ると手袋を一日中はめいていた。それでも手がいつもつめたい。注意しないと、霜焼けも出やすかった。暇さえあれば、父は自分の手で私の手を包んで暖めてくれた。そのたこだらけの手は肌が硬くてざらざらしているけど、とても暖かった。そして私が勉強しているとき、父はそばに座って、私を見守るのが楽しみだった。彼は粗い指で自分には分からない本を、きわめて慎重に開き、微笑みながら読むふりをすることもあった。野に出て働く時間になると、彼はいつも私の頭をそつとなでてから、満足そうに立ち上がって静かに家を出て行った。父に頭をなでられることは、私にとってこの上もない励みだった。私には父の期待が感じられた。その時は、父の手が柔らかく、やさしいものに見えた。

いつのことだったかは忘れたが、幼い頃、父は私を

父の愛

幼い頃の私には父の面影はなかった。父のことを記憶に呼び起こそうとどんなに努力をしても、やはり白紙に戻ってしまう。だから父の愛に触れた記憶もまったくない。しかし、今は違う。確かに父は空気のような存在であっても、その愛をひしひしと感じることができ、私には欠かせない存在だ。そして父の愛に自分はどう感謝して、どう報いればいいのかも分からないほどだ。

父は素朴で実直な農民だ。彼は私たち兄弟四人がまだ幼い時から、何アールもの農地を耕すかたわら、大好きな大工の仕事でわずかな収入を得て家族を支えてきた。



林燕鳳（リンエンホウ）：女、1988年8月26日生まれ。2006年9月に福建師範大学外国語学院入学。2007年に国家奨学金と福建師範大学一等奨学金。2008年9月にクラスメートと福建師範大学日本語クラブを作り、会長補佐を担当している。将来は国際関係に関する仕事に携わりたい。

福建師範大学二年生

林
燕
鳳

もう六十歳を超えた父は昔を引きずったままだ。時代の波に乗れないまま、何十年前のやり方にこだわっている。昨年、小学校の改修工事を引き受けた時、兄に何度も何かハイテク機器を使えば時間と労力の節約になると勧められた。だが、いくら言われても何十年も愛用してきた道具を捨てられず、昔ながらの手作業を続けた。そのせいか、今だに貧乏生活から抜け出せない。

生活苦のため、私は生後四カ月から高校二年生になるまで、叔母の家に里子に出された。その間、父は仕事一筋だったとはいえ、一度も私に会いに来てくれなかった。父の腕に抱かれることも、ひげ面に触れることもなく、匂いをかぐことはおろか、父の存在すら感じることができなかった。大きくなっても、こんな父を父親として認めることができず、正直言つて嫌いだった。

高校生になっても、父の愛情を感じ取ることができ

なかった。毎日が、へんびで時代遅れの山村と父から、自分を解放するための闘いだった。努力してして、やつと入学試験に終止符が打たれ希望校を選定している時期に、父は自分の要求を突きつけてきた。「将来は田舎に戻って教師の仕事をやってくれ。教師の仕事はいい。仕事の場所も家に近いし、おれはお前の力にもなつてやれる。しかも教師に恵まれない山村の子供たちのためにもなれる。」と勝手に決め込んで、私の思いや希望をまったく考えてくれなかった。

田舎の煩瑣な農事、時代遅れの考え、情報不足と不便さ、すべてが息づまるほど怖かった。田舎のすべてに決別しようとする父の願いを無視して、自分好きな専門を選んだ。ところがある日、家に戻ると、父は不機嫌で暗い顔をして「どうしておれを裏切ったんだ!」と怒鳴りだし、私にびんたを食らわせた。そして「希望校を師範学校に変えないなら、学費も何もかも自分でまかなえ!」と言つて突き放した。

